

伊豆の地獄

地獄に嫁いだ嫁

伊豆極楽苑は地獄の存在と天国のありがたみ、生きていく意味を知らせるテーマパークとして設立されたが、現在はユニークな施設として知られている。館内の三途の川から迫力のある閻魔像など地獄のアトラクション、園外にある看板や装飾物なども、観光客だけでなく、通りすがりの人にも話題になっている。近年では地獄の閻魔像に日頃の行いを悔い改める幼児の教育施設としても注目を浴びている。その「極楽」を案内するのが佐藤華扇さんだ。華扇さんは、現在の館長であるご主人と結婚。「やらかしポイント」は結婚後に伊豆極楽苑の設立に夫婦で参加した部分。華扇さんは笑顔で「地獄に嫁いだものですから」と話す。

伊豆極楽苑も今年で32年目。31年も長続きする理由は、来場者への丁寧な説明だけでなく、多くのメディアを寛容に受け入れている部分。この「地獄」に住んでいる家族の人のよさが、継続する秘けつとも言えるだろう。家族が作る地獄は、話題になるコンテンツ満載だ。



今回は街で活躍する人の情熱の元となった「やらかしポイント」を紹介！

人々から愛される FMIS

伊豆市柏久保1304
放送時間・月～金 7時～21時
土日 8時～20時
受付時間・10時～17時



伊豆に移住！
きっかけは誕生日の「アレ」

石川県金沢市出身の仙座夏子さん(27)。彼女は伊豆市を拠点とした地域局「FMIS (エフエムイズ)」に勤務している。

伊豆とのきっかけは大学時代。地域活性化のボランティアで伊豆市に来たときに出会った当時の社長に「面白い会社が出来たら参加しないか？」と誕生日に声をかけられたことで、修善寺に移住を決意。これが彼女にとっての「やらかしポイント」だ。

この仕事を続けて、5年目。彼女が自ら集めた情報は、自らの声で発信することを大切に「分かりやすく情報を伝えるためには、まずは自分が情報を十分理解すること。そして地域の人にとことん関わることを心がけている」と話す。その結果、彼女のもとにはまだ誰も知らないコアな情報が集まり、彼女の情報網は今後も拡大を見ている。

仙座さんは、伊豆の特徴について「自然だけでなく、人々の心が温かく、個性豊かな人が多いこと。その魅力を今後もつなげていきたい」と話す。



やらかし先生

伊豆市 伊豆市土肥206
050・5309・2477
izuegasai@hotmail.com

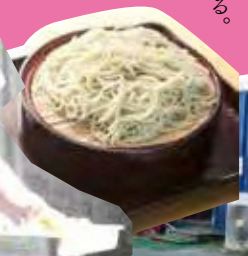
原さんの「やらかしポイント」。その製法は、麺が伸びる時間が極端に短く、手早く提供することを強いられた。しかし、西原さんは「究極のそば」を多くの人に味わってもらいたいと考えた。そのため数店舗あった大型店を畳んでまで「究極のそば」の提供にこだわった。

そばは挽きたて打ちたて、香りと味わいを活かした特殊な3層面。つゆも素材ひとつひとつにこだわった。そしてきれいな水にもこだわりの見える。西原さんは「心が乱れたら麺が乱れる」と話し、良い麺を作るために環境の良いこの地を、そば屋を営む重要な場所として選び伊豆の山中に新店舗を構えた。西原さんは伊豆市とは溢れるほどの魅力を感じる地だ、と話す。

空前絶後の究極のそば

心が乱れたら麺が乱れる

伊豆市下船原446の1
090・4239・9786
営業時間・11時～
売り切れ次第終了
定休日・水曜日



熱い伊豆映画祭 in 土肥劇場

伊豆市・土肥地区でひと月に渡る「日本一長い」映画祭、その名も「伊豆映画祭 in 土肥劇場」が毎年夏、開催されている。

その映画祭を運営するのが、東京在住の映画監督・瀬戸慎吾さん。土肥地域との出会いそのものが、映画祭のきっかけになった。瀬戸さんの「やらかしポイント」は、映画『海のふた』の助監督として土肥に初めて訪れたとき。その後、土肥を気に入った瀬戸さんは、自身でツリーハウスを建て、そこを舞台に長編映画「軽やかに地平を狙え」を制作した。かつてはあった映画館が今はなく、そこで、古民家を利用した夏だけの劇場を2015年に開館し、映画祭をはじめた。

最初は認知度も少なく、来館者ゼロという日もあった。「資金を捻出するため、愛車を手放した年もあった」と瀬戸さんは笑って話す。それでも地域の人々、毎夏訪れる多くのゲストや映画を愛する人々から支えられ、映画祭が続いている。「伊豆の人と映画が好きだから。映画という文化を知ってもらい、映画を人生の参考にしてもらえれば。この映画館で映画を初めて好きになったと話してくれた人もいました。映画は体験そのものです」。

彼の土肥と映画に対する愛情が、この映画祭を支える原動力になっている。

